
魔法少女リリカルなのは・堕ちた天使のKind or Terrible ?

光沢を持つこんにやく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは・堕ちた天使のKind or Terrible？

【Nコード】

N1930K

【作者名】

光沢を持つこんにやく

【あらすじ】

時は遡り時代は魔法少女リリカルなのは第1期！！
フェイトが管理局員に発見されずに最後までP・T事件に参加出来た理由が今ここに！
知られざる、ある局員とフェイトとの出会い。その果てに局員とフェイトが知った答えとは…？

文章とストーリーが雑です。

（前書き）

まず最初に、魔法少女リリカルなのはファンは余り読まない方が良
いかも知れません。

マジで文章とストーリーが雑なんで…本当に原作ファンには申し訳
ないの一言です。すいませんでした。

日は落ち、空が黒色に染まり始めた頃。
紫色の長髪、青色の瞳を持つ男――シデン・クウは街中を歩いていた。

「この服装…明らかに浮くな」

そう呟く彼の服装は、本当に浮いてしまう代物だ。
濃い黒に薄い紫の混ざったようなコート、同色のズボン。ここまでは普通なのだ。

しかし、彼の肩と手には鉄製の防具が身に付けられている。
脚に至っては靴の部類に入るのか、鎧の部類に入るのか、良く分からない鉄製の具足。

挙げ句はコートの下に着込んだ鉄製の鎧と手に持つ白い棒。
先端は青色の球体が黒色の弧の上に乗ったようなデザインになっている。

どれもここ、『第97管理外世界地球・海鳴市』には不釣り合いな物ばかりだ。

いい加減視線に耐えられなくなり、シデンは足早に自身の新しき住居へと向かい出す。

――

自身の新しき住居であるマンションの一室へと身を移したシデンは、パソコンのキーボードを必死に叩き続ける。
どんな仕事にも付き物である報告書の作成だ。

「はあゝ…引っ越したり、報告書書いたり忙しい」

溜め息の後、シデンはパソコンの画面から目を逸らし、引っ越しのついでに買ってきた冷蔵庫の中身の誘惑に負ける。

因みに使っているパソコンはかなりの高性能。

この『地球』という世界の物ではないが、ボタン1つでいつでも好きな時に自分の前に画面と簡易キーボードを展開出来る代物なのだ。逆に、使わない時はテレビの電源を消す容量で画面も簡易キーボードも消えるので本当に便利だ。

しかし、この時にシデンは画面を消さなかった。何故なら、彼を誘惑した者とはビル。

飲んだら直ぐに仕事を再開するつもりだったからだ。

そして、報告書の内容は…

『次元犯罪者フェイト・テストロッサ搜索班 班長 シデン・クウ

第97管理外世界に全部隊の到着を確認、明日には調査開始が可能。

発見しだいこの件の調査担当 アースラへの情報報告をすることとします。尚、この件で」
』

- - -魔法少女リリカルなのは・堕ちた天使のKind or T
errible? - - - 始まります。

――

シデン宅 - - P M 2 3 : 4 8

「あ……」

漸く報告書を作成し終わり、睡眠を取ろうとしたのが このシデン・クウ。

世界中には幾つもの別次元が広がり、その次元を統率、法の執行をするのが彼の所属する『時空管理局』。

また、彼が長期出張で家の物を大半かつぎ込んだこのマンションのある世界は『第97管理外世界地球』。

管理外世界、つまりは時空管理局が統率、法の執行を行っていない次元の世界なのだが、そこに時空管理局が追っている犯罪者、または管理局が対処に当たらなければならない事件が起きれば如何に管理外世界とはいえ、管理局が動かないわけにも行かない。

今回もそのケースでシデンを含む数人の少数精鋭部隊が送り込まれたのだ。

正直、この事件の担当になった時にシデンと他数名は良い顔をしなかった。

シデンはまだ一人暮らしなので問題無いのだが、他は全て既婚者なのだ。 子供も居る。

挙げ句は、この事件の主犯と思われるフェイト・テストロッサとは、9歳程度の少女なのだ。

つまり「駄々っ子」に近い。

自分の身勝手で管理外世界での犯罪を働き、結果としてシデン達大人に手をやかせている。

射殺許可を求める局員もいたが、流石に9歳程度の少女に射殺は可哀想と宥めたのも哀れに感じてくる。

上司の「毎日報告書を書いて送ってくれたまえ」には「ええ、構いませんよ。あなたの射殺許可が頂ければ」と言い返しかけて、思い出せば今でもヒヤヒヤする。

そんなこんなが出来事があり、今現在に至るわけだが、またもやトラブル。

必死に報告書を書いていたせいで、ご近所様へのご挨拶を忘れていたのだ。

しかも、明日は朝から捜索班の今後の行動についての会議。

つつい脱線する愉快なメンバーとの会議は、楽しいのだが、長く掛かる。帰って来るのは明日の18時位といった所か…

「はあ……」

こんなので果たして平気なのかと、溜め息を吐きながらシデンの捜索初日は終わりを告げた。

――

事態が進展したのは、まさに捜索2日目の午後18時のことだった。

シデン宅近所・PM18:04

ーピンポーン

このマンション、割と新しいらしくインターフォンの音も綺麗だ。

「はい」

そんなインターフォンの付いたドアの向こうから聞こえて来る声も、また綺麗だ。

こんな考えを知らず知らずの内に行っていたシデンは慌てて首を横に振る。

結局会議の後、「班長」ここに犯人が居ないか調査しましょう」と無理矢理 居酒屋に連れ込まれ、かなりの量を飲まされたのだ。

向こうの奢りだからまだ許せるが、これで「奢ってくださいよ」などと言われる物なら「ああ、良いぞ。お前らを射殺した上でお前らの財布から俺が出してやる」と言い返すつもりだったので、正直安心している。

思い出したのだ、昔似たような発言で管理局沙汰になった黒歴史を…

良く管理局に入隊出来たものだ。他の隊員も、何故クビにならないのか少し不思議な面子だらけだが、それは今関係ない。

ーガチャッ

と建て付けの良さが一発で分かる音と共に顔を出したのは…

「ーへ？」

オレンジの髪、シデンの今の服装はこの世界に合わせた物だが、シデン同様異世界の物であると一発で分かる服装。

最後に、隠してはいるが異世界にしか居ないはずの狼の耳と尻尾。

額の宝石が完全なる証拠だ。

（確かコイツは…）

フェイト・テストロッサの魔力による疑似生命。使い魔アルフ。

偶然とは恐ろしいことだ。シデンは自分の目標とも言える次元犯罪者の使い魔の部屋の隣に引っ越してしまったのだ。

ある意味では幸福、ある意味では拍子抜け。そんな言葉が今のシデンにはぴったりだ。

だが、ここで焦ると大変なことになる。

フェイト・テストロッサの魔力値は推定だがシデンを容易に凌ぐ。ならば、この場で正体を明かさず、仲間を呼んで一気に攻めるのが懸命。そんな判断を出すのは、唯一低魔力ランクで捜索班 班長を任せられる IQ240の持ち主 シデン・クウには余裕のことだった。

しかし、IQ240のシデンにも抜けていた点がある。

割と最近まで『魔力値』という言葉が知らなかったのだ。

時空管理局の局員や管理世界の資質ある人間は魔法という力を使う。

何故か？その疑問に関しては意外と深い事情がある。

例えば日本刀と魔力で出来た日本刀があるという。

日本刀は全ての人間が持てる。子供でさえも…

つまり、子供でも人を殺せてしまうのだ。

だが、魔力で出来た方の日本刀なら魔力資質を持ち、尚かつ常識のある人間しか持てない。

つまり、魔力の少ない子供では人を殺せない。と言うことだ。

他にも非殺傷設定だの理屈をこねれば幾つでもあるが、その辺の勉

強はIQに溺れ過ぎたシデンの一番疎かな部分だ。

ここが優等生とIQ240の差になる。

そして、魔力値というのは個人の魔力量の総称である。

EからSSSまで存在し、シデンはC。フェイト・テストロッサはAA A相当と聞かされている。

その使い魔だ。魔力値がシデンより高いのは必然的。
だからこそ、この場ではただの入居者を偽り…

「何をマヌケな面してんのさ？

部屋…間違えた？」

ついついマヌケな声を上げたシデンを心配するアルフを欺く。

「あ、いえいえ。すいませんね。

隣に引越してきた…魅^み柘^せ度^{たろつ} 太郎と申します。

これから宜しくお願いします」

馬鹿だ。この人馬鹿だ。

偽名が管理世界ミッドチルダの『免許証記入例』の物と全く同じ物
になっている。

IQ240…変に柔軟性に掛けてしまふのは何故か？

「あゝ。お隣さんね、はいはい。

で？これは貰っちゃっていいの？」

こつちもこつちでスルー、裏でネタでも作っただんじやないのだろう
か。

いや、アルフは大好物の匂いが鼻を誘惑したことに半分我を失って
いる。

「最初が大事」とアースラの執務官補佐に言われたシデンは、張り切り過ぎてかなり上物の牛肉を持ってきていたのだ。

（命拾いしたな…死体のお陰で。）

こんな時、ふざけたことを考えられるシデン自体がふざけているとしか思えない。

「はい。どうぞ宜しくお願いします」

イマイチ気が進まないが、ここで「いえ、あなたに渡すものではありません」とも言えず、牛肉を手渡すシデンだが…この時事件は起きた。

ーパサッ

「ん？」

「！！」

何かがシデンの胸ポケットから落ちた。
その正体は管理局の局員証明書。
次の瞬間には

「うがつ！」

シデンの顔面にはアルフの拳がめり込んでいた。

――

恐ろしいことに目を覚ましたのは翌朝。

搜索3日目のAM8:42

アルフの強力な拳とシデンのひ弱さが重なったからこそその綺麗なノックアウトだ。

だが、不思議に思う点が1つ。

「目…覚めました？」

手も足も縛られず、わざわざソファアの上で毛布まで掛けて寝かされている。

そんなシデンに声を掛ける少女こそ、今回の最大の目的。フェイト・テストロッサ。

「なんの…つもりだい？」

相手が少女の為か？厳しく言葉を放つ所でも優しく問い掛ける。

「あの…ごめんなさい！アルフが失礼なことをして……」

言いながらフェイトはソファアの近くのテーブルにコーヒーを置く。

「温まりますよ？」

確かに朝は少しばかり肌寒い、シデンもそう感じたのか無言でコッ

プを手取る。

「……の匂い」

「？」

「君から血の匂いがする…でも、君は人を殺める人間には見えない」

今のシデンにはフェイトが『駄々っ子』だの『射殺がどうの』などのことは頭がない。

いや、それを今否定した。

こんな優しいそうなの…否、感で分かる。こんな優しい少女が身勝手なことで犯罪に手を染めているとは到底思えなくなつた。

簡単に信じ過ぎ？…シデンはこれでも人が人を裏切る様や、美しい友情を幾つも見て、経験してきている。

だからこそ、少し話しただけで、その人間のタイプが大体分かるのだ。

「なんでも…ないんです。少し、怪我しただけ…」

そういう割には目に涙を溜めるフェイトを心配し、シデンは強引に彼女を自分の方に引き寄せる。

美しき金髪は子供らしいツインテールに纏め、『美しい』を『可愛』にセーブしている。この時点で謙虚な娘だとシデンは判断するし、白くて透き通りそうな肌と細い腕は、とても進んで犯罪をする者の体とは思えない。

だが、足りない。

なんだろう？

シデンは考えた。

瞳だ。

綺麗な紅い瞳には、子供らしい可愛さではなく、寂しさしか感じない。それを見て、簡単に察しが付いた。

『鑑定の瞳』^{ジャッジ・ビュービル}と呼ばれるシデンの希少技能。

ある程度の段階まで相手を分析すれば、後はその人間の全てを見ることの出来るSSSランクの魔法に等しい技能。

それを、様々な人間を見てきたシデンが使うからこそ恐ろしい効果を得られる。

これがシデンを低ランクで班長まで出世させたもう1つの理由だ。

「っ！！」

しかし、それで見えた物はシデンが今まで瞳に移したことのない。
新たな人間同士の触れ合い

――

暗闇の部屋、中央に少しの光があるなかでうつすら見えるのは張り
付けにされたフェイト。

それを残酷にも鞭で何度も何度も叩き付けるのは彼女の母親――プ
レシア・テストロッサ。

ジュエルシード。滅びた過去の遺産であるその宝石を集めなければ、
フェイトはこうして何回もプレシアに叩かれるのだ。
「全部集めて来て……」

この言葉に従えないなら叩かれるだけ。

何度も

何度も

何度でも

――

「君、1回服を脱いでくれ手当てし直す」

鞭の怪我はアルフによって手当てされているようだが、余り良い手当てとは言えない。

そこまでしか希少技能では見えなかったが、『フェイトが悪いわけではない。母親に命令をされているだけ。』だというのは分かった。取り敢えず、何の慰めにもならないがシデンは救急箱を取り出し、フェイトの手当てをし直した。

「い…良いですよ」

「良くない。何も……君は悪くないんだろ？
直ぐに母親を裏切ってこっちに来なさい。
管理局は全力で君を守……はがっ！！」

「フェイト！大丈夫！？」

買い出しに出ていたアルフだが、やはり長時間管理局の人間とフェイトを2人きりにさせるのは不味いと慌てて帰ってきたらこれだ。

捕まえるならまだしも、服を無理やり脱がせているなど…呆れながらも手刀をシデンの頭に喰らわせ

「ていうか、あの鬼ババのこと喋ったの!？」

シデンがプレシアについてを知っていることに、今更驚愕を始める。

「アルフ…母さんを悪く言わないで。

でも、おかしいよ。私、この人に何も喋ってないもん」

「お前!管理局はどの辺までことを掴んでるんだい!」

次にシデンが喰らうのは、過酷な拷問だった。

――

「と、いうわけで俺の希少技能でちょっくら調べました。」

フェイトに包帯を巻き直しながら、シデンは説明していく。

あの後、フェイトの提案によりなんとか『話し合い』の形でことは済んだ。

「ん、終わったぞ」

「ありがとつ…ございます」

しかも、シデン。この短時間で少しばかりフェイトと打ち解けている。

怪我の手当てとは、そこまで絆を深めさせる物なのか？

「なあ、フェイト。管理局に来てくれ
悪いようにはしない」

「フェイト…どうする？」

管理局に今、出頭すればまだ罪は軽く済む。

シデンも法の守護者だ、当然それを進める。
だが、しかし

「ごめん。シデン…私は母さんの味方だから……」

フェイトの返答は歓喜を上げられるものではない。

これを聞いたアルフも、少し残念そうだ。

彼女もまた、フェイトには普通の人生を歩いて欲しいと思うからこそ、何度か局への出頭もススメたのだが…やはりダメかといった具合にうなだれる。

「そうか…」

シデンはそれ以上何も言えない。言えなかった。

相手は少女だというのに、恐怖したのだ。――アノケツシンハ

コワイゾ 本能がそう囁く。

横目でアルフが「逮捕はさせない」と身構えるのを見ながら

「ふう…こちら、シデン。B地区異常なし」

フェイト達を庇った。かと言って、フェイトに恐怖して庇ったのではない。

彼もまた、正義を貫く者として1少女を守ろうと決めたのだ。

「シデン」

「あ！そうそう」

「？」

「その牛肉、今晚のメインディッシュにしてやるから取っとけよ？」

「大丈夫なの？」と言葉を繋げようとしたフェイトだが、シデンの優しい微笑みに微笑で返すことに止まった。

――この人の決意を揺さぶってはいけない、と。

――

正直、自分でも自分にイライラする。

なんで管理局を、敵を信頼し始めているのだろうか？

そんなことを思いながらフェイトは母親の写真に視線を向ける。

「母さん…私達は本当に正しいの？」

この言葉の辛さと重さを理解できるのはフェイトの他に、使い魔を超えた存在『友』であるアルフしか居なかった。

――

「君がここまで役立たずだとはな！」

机をドンと、力強く叩き怒鳴り散らす中年の男の姿がそこにはあった。

「すいませんでした！」

その男に頭を下げるのは紫の長髪、シデンだ。
単身赴任の最中に本局に呼ばれたから何かと思えば

「捜査は進まず、班長は君みたいな屑。こんな事は言いたくないけどね！私は君にイライラを隠せないよ！」

「んだと！テメエ！！」と今にも掴みかかりそうな親友兼部下をアイコンタクトで宥め、再度頭を下げる。

この時のシデンは、まだ普通の段階だったと言える。

――

だが、2回目。 また本局に呼び戻された時には、ふと考えてしまう。「フェイトを売れば、こんな状態からの解放。 あわよくば出世さえ出来るぞ」と。

しかし、まだ頭を降って そんな邪念を振り払う。 自分はあの少女を救うと誓ったのだ。

彼はプライドを捨てて頭を下げる。

――

「ねえ、シデン。大丈夫？」

フェイトと出会ってからどれくらいの日時が経っただろうか？ それはそれは、数え切れなくらいの思い出を作る程の期間に至っていた。

その間で、シデンはフェイトを娘のように思い　フェイトとアルフの部屋に居る時間が大分増えていた。

だが、シデンには日に日に苛立ちが募る。　少女を庇った拳げ句に自分の立場は危うい。

後にP・T事件と呼ばれるこの事件もいよいよ終盤。　終わりの辺りからシデンが入ったので、大したことをやった訳でもないが、それでもフェイトの手当には全力を尽くした。

「ナノニナゼオレノイラダチハキエナイ？」

P・T事件の幕引きが彼に分かるわけではない。ジャッジ・ピューピルでも未来は見る事が出来ないのだ。　当たり前の答えである。しかし、ジュエルシードがフェイトとそのライバルである名も知らぬ少女との間に集まりつつあることから事件の終幕が近いことは容易に予測出来た。

嬉しいことだ、もうフェイトは傷付かないのだから…

「シデン？」

しかし、心配して自分の顔を覗き込んで来たフェイトと目が合った時、苛立ちは爆発した。

「バキッ！！」

一瞬、何をしたかは分からなかった。
気が付けば自分の左拳はフェイトの可愛く、切ない表情の顔面を殴ってしまっていたのだ。

「あ…ああ あ」

ここまで来て分かった。自分はムカついていたのだ。
自分がプライドをスタボロにしているのにも関わらず、フェイトは感謝の念を示す気配がなかったから…。
当たり前だ、全て自分が勝手にやったことだから。
「う…ごめ」

「いいよ、もつと殴っても…
それでシデンの気が済むなら」

「!!!?」

しかし、フェイトは優しくった。 尚もシデンを気遣ってくれてい
ることに今更気が付く。

何やらアルフは此方を睨んでいるが、フェイトが宥めているらしい。

「フェイト…ごめん、な。ごめん」

言いながら、フェイトの頭を優しく撫でてやる。

この3日後に、P・T事件が幕引きするとも知らずに。

――

その日、フェイトは管理局の戦艦アースラのベッドで眠っていた。
ライバルの少女には敗れ、母親には「あなたのことが大嫌いだった
のよ!」と『ある冷たい真実』と共に捨てられ…あまりのショック
に魂の抜けた人形になってしまっていた。

だが、直ぐに目覚めることが出来た。

大切な人達のお陰で……

――

ここはどこだろう? 死んだような瞳に映るのは真っ白な世界。
奥で、椅子に腰掛け本を読む『とある使い魔』と その隣で同じ

ように腰掛ける』とある管理局員』。

管理局員は言うまでもなく、シデン。使い魔は、自分の恩師だ。

ーリリス？ シデン？

心では言葉を発せられるが、それを口から出すことは出来ない。

「久し振りですね、フェイト。」

「俺とは、昨日も会ったな」

しかし2人は普通に声を発する。

「フェイトは私の自慢の教え子なんですから、挫けないでください」
恩師リリスはフェイトの手を強く握り、フェイトの武器である金色の小さな三角形ーバルディッシュ待機状態をしかと託す。

「この子も一緒に……」

バルディッシュ、行ける？

『Yes , Sir . 』

「全部終わったらまた　これがメインディッシュだ！」

牛肉を取り出すシデン。

温かいな……。　うん、行こう！みんなに支えられて、私は生きて
いるんだから――！

――

かくして、フェイトは愛と友情を知る形でP・T事件に幕を引いた。

一方のシデンだが…

「クビ…か」

シデンの手には、クビを宣告する悪魔の紙が握られていた。

「ちっ！」

1度大きく舌打ちをすると、シデンは近くの森林へと歩き去っていく。

――オレヲテキニマワシテタダスムトオモウナ！！

――

数年後、堕ちた天使であるシデンをフェイトが討つことになるのだ

が、それはまた別の物語。

(後書き)

本当にやらかし過ぎました。
当にありがとうございます。

最後まで読んで下さった読者様は本

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1930k/>

魔法少女リリカルなのは・堕ちた天使のKind or Terrible ?

2010年10月12日06時30分発行